

者を出すようでは、一体この先どうなるのかと胸をしめつけられる思いであった。ともかくジャングルのなかにひそみ下村大尉が先行したあとをさぐりあて、前進することにした。そうしているうちに、数人の部下と共に休息していた閣下を発見することができた。

かくして二月にはいるや、ついに支隊主力も兵力が半減してしまい、もうそれ以上の攻撃は不可能になってしまった。

生き残った者は掘りあてた芋をかじりつつ、幽鬼のような姿になりはててワウを撤退することになってしまった。生きている者として自分の体を運ぶのが精一杯で、病人や負傷者は、そのまま戦場に置き去りにしなければならなかった。生き残った私たちが養便にまみれ、暗闇のなかを撤退したのち、後方のジャングルのなかで、しきりに自爆する手榴弾のさく裂音がこだましていた。昭和十八年二月七日の夜であった。

太平洋戦争参加苦勞体験記

愛知県 大山 宏

昭和十三年七月第一回動員召集を受く(中国)。

昭和十八年第二回動員召集により赤道をこえ南下、西部ニューギニアに派遣され、敵襲と病魔になやみ九死に一生をえた私は幸か不幸かわからぬまま帰還し、昭和二十一年六月、生まれ故郷で家族の一人となって現在に至る。

我が部隊は野戦自動車廠、勢第一六四〇二部隊、内地召集兵六百人、中国派遣よりの現役兵混入の六百人を以て、千二百人の一個部隊を現地で編成した。

— 崇める神は生きている骸骨 —

氣候風土に恵まれないニューギニア島は原始的人間のすむ島であった。われらは未開ともいえる文化のないこの地に送られた濠洲作戦の要員である。無暴きわまりない戦略の犠牲者だ。上陸後、戦況は悪化の一途である。

後続の物資の補給はとだえ、我々とともに積んできた必需品のほかなんの補給もなく、食糧・医薬品等一日も欠くことのできない大切な物も欠乏して病状は重なっている。

昭和十九年五月から過労と気候の悪化、そして体力をおぎなう食糧もないため、ひとたびおかされた病はもとにもどるのはむずかしい。各自が病を精神力でたもつばかり。

野草の採取をする。果実は大勢の日本軍のためすべてのはなくなつた。敵機は毎日飛来する。制空権をうばわれた日本軍はなにひとつ有利な点はない。ゆうゆうと機銃掃射はする、爆弾はおとす、高射砲隊もいるけれど一発でも発射するとみつけれ、たちまちにして全滅させられる。手を出すこともできない、壕にはいり避難するほかない。被害は続出するばかりである。防空壕に直撃弾を受け全員死すこともあった。

そんな無惨な間にも兵隊たちは銃のかわりに刃物を持ち木をたおし、鋏を持ち開墾し、食糧のさつま芋、とうもろこし等の栽培作業をする。本当に動くことの出来ない

い患者ばかり幕舎に残しておくのであった。前線の兵士がこんな所まで来て銃を捨て、生きるための食糧生産作業をすることは、誰が予想したことか。その収穫が我れ等、日本人のいのちのつなであった。

生きるための窮余の策とはいえ、

「これほどからの飯ごうだけあたえて遠い太平洋の荒波にさらしておくのはあまりといえど人道にはずれていゝ。なぜそれほどにして戦わねばならぬのか」。

戦友たちの間でも不満はつゝある。昨日も今日もと、病に倒れ帰らぬ人となつてゆく。骨と皮、ミイラのような姿が動く、衣類もなくなり素裸の股には手拭にひもをつけてあてた。帽子だけかぶり、はき物もない、ポロ切れを巻きつける、これが平常な服装である。身体の内のが目立つ。骨が動く音が聞こえないのが不思議のようだ。こんな身体でよくも動けることと思う。うしろから手を合わせおがみたいこちがする。自分の身もそのような姿であったのかもしれぬ。まさに生命ある骸骨だ。

このような姿を肉親がみたならどんな気持がするか。

おそらく悲惨な現実に声にもならず、なげき悲しみの心は察するにあまりあるものと思う。悲惨な友の姿も我が姿も同じであつたらう。

——幾多の戦友の不幸と苦勞を目前に——

苛酷と悲惨な年月は過ぎていく。夜になると、

「俺は今日も生きていたか」

疲勞した身体を幕舎の丸太の上に横たえて休むのだ。

さびしいつらい毎日だ。夢でもいい、ふるさとに帰りた
い。楽しくなつかしい家族の顔、腹がすき眠られない、
腹の虫がなにか欲しいといつてグーグーと泣く。その声
を聞くと疲れた身体でも眠りにつくことができぬ。蓋
を外した飯ごうを幕舎のそとにだしておくくと雨水がたま
る。うえがわの水をそつと飲む。底には砂がある。一時
的に満腹感がある。

眠りについた。尺八の上手な下士官がいて、毎夜のよ
うに吹奏してくれる。心のかてとなつて楽しい。「誰か故
郷を思わざる」のうたである。この音を聞くごとに故郷
への哀愁がよみがえる。赤道直下の悪条件のともなう
地、ふたたび家族との出会う希望もうすい。それゆえに

このうたこそなつかしいのだ。知らず知らず私も口ずさ
むのであつた。映画「愛染かつら」とともに好む。

「待てば来る来る春が来る、

やがて芽を吹く春が来る」

とうたいながらも、実はその望みは遠かつた。「貧すれ
ば鈍する」のたとえのとおり、生物は食を求めていきる
だけで終わるのだ。無謀な侵略戦争は国民を苦しめるに
終わり、なんの効果もない。今現在が食に飢え、病める
戦友に力づける食物も薬品もない。こんな戦いがなんの
目的で行われるのか。採算あつての戦いか、目ぼしい利
益はなになのか、何の実感もなくただ苦しみにあえぐだ
けである。

兵全員は食に飢えて食物探しに、毎日誰かがあき袋を
かつぎ、野草などとつてくる。その野草にも毒性が多い。
下痢するものもでる。野草採取にかけまわると一個の軍
帽が落ちてゐる。足で何気無く蹴ると骸骨がころがって
出た。友軍兵士らしい。いつしか死んで白骨になつてい
る。そんなのは珍しいことではない。各部隊ともゆくえ
知らずの者が多い。いまだおれか、敵機の犠牲になつた

者である。死後一週間から十日ぐらい過ぎたところが悪臭のひどい時である。死体でも雨に打たれたものは美しくなっている。誰なのかわからぬ。持ち帰ることも出来ず、可哀想だがしかたなくそのままにしておく。

一日中袋をかついでもわるのだが、食うに安心するものはみつからない。谷川のそばに行くと言蒲のような長く伸びた草の葉にナメクジ、カタツムリなどと多くとまっている。それをとってきて熱い湯にいれ塩をつけて食う。みみずは皮をむき太い番線に巻き塩焼きにする。なかまでこげるほど焼く。ポリポリとしゃぶる、味があつてよい。

海岸にでるとヤドカリが多くいる。拾い集めてすりつぶし塩をいれて少しおくと塩からとなる。パイヤの身が一番味がよく主食の代表となる。色ずいたものは少ないが、甘くてやわらかい。小さく青いろのは若いから固い。木を倒し、全部持って帰る漬物にする。パイヤの木の根を掘りとって皮をはぐ。芯は案外とやわらかい。漬物とした。若い実は煮て食うと冬瓜のようだった。生命を保つのみが精一杯だ。こんな日も続くなかに芋づる

の葉も大分伸びてきた、つみとって塩水の汁を作り、茹であげアク抜きにして塩汁をかけて食う。野草よりはるかにおいしかった。そして芋も出来て堀り、とうもろこしも実がついた。それらのものを主食とした。元気づいて皆活気が戻ってくるようであった。戦はまだ続く。

— 頭上に旋回する三機の戦闘機の狙撃 —

晴れた朝九時ごろか、われら十二、三人、ある地点に出かけた。東方から爆音とともに機体をさげて飛んでくる三機の敵戦闘機、避難するまもなく我が頭上で旋回とともに射撃を始める。持った鉄帽も頭にのせたが紐をしめることがならず、近くのバナナの木のかげにすわりこんだわれら三人、三十メートル先にジャングルがあるがそれまで行くことができない。三機は旋回しながら交互に発射する。弾丸は身近の草むらに土を飛ばしプスプスとぐりこむ。われらは狙いうちされているのだ。「動くな死んだ真似をしろ」と友に小声でいった。鉄帽が滑って落ちそうだ。紐をしめたい。しめることも身動きひとつすることもできぬほどに体がかたまつた。頭に浮かぶことは死である。

十三ミリの機関砲の威力はトラックのホイールでも打ち抜く。手足にあたればちぎれてしまうのだ。死ぬのはおそろしくない、しかし不具者となり痛い目にあうのはごめん。頭か胸に命中し一発で絶命したいと願った。

三機は我々が動かないので西方へ飛んでいった。この間は長い長い時間で苦しかった。実際には二分あまりかも知れぬ。対抗する気力もなく体力もない敗残兵同様のわれら日本軍の地におちた状態は実にあわれというほかない。

— 部隊長の訓示、戦陣訓に基づく —

何の威力もなく体力も衰えてただ生きているだけのわれら日本軍は神経質となっていた。いつまでつづく戦いか、生きるだけの毎日である。そんなある日、部隊長が全員の前で訓告した。

「皆知っているように戦いは悪化し、物資補給の船は爆撃にやられ、いのちと頼む食糧も医薬品もなくなつた。今後求めるべきは自己の持つ精神力ひとつである。自分の体はその精神によって日本軍らしく動いて頂きたい。最後の花は自分の行動にあることを忘れずに」

との悲痛なことはであった。

「生きて虜囚の汚名を着るな、死して護国の鬼となれ」
戦陣訓を基本とし、各自が二個の手榴弾を渡された。常時腰につけていた、窮余の策である。対敵の一個、自決用一個だ。

— 意識不明の身より死線を脱す —

一旦、病魔におかされるとその回復は困難だ。食糧も栄養剤もない惨状のなか、本当に精神力しかない。精神力はどこまで続くか、生物は草木に至るまで吸収すべき物によって生命をつないでいるのだ。軍医長自身四十歳の坂を越えておられる。体力げんたいと責任感からか、ピストル自殺された。そして部隊長も自殺。はかない前線の状況だ。そのころ自分は病身で暮舎の中で休んでいた。戦友が洗ってくれた肌着を紐に掛けておく。三日過ぎてても乾かない。日の差さないジャングルのなか、敵の眼を避けての暮舎だ、湿気が多い。白くカビがつく。その水洗いだけのしめった肌着をはずし着かえる。はだの熱温でかわく。洗った物は気持がよい。汗の泌みた肌着とはくらべものにならない。

病状は次第に重くなっていた。眼は疲れ、頭は朦朧とする。耳は遠くなる。友が差し出した塩汁さえ飲む気が出ない。幻のように故郷の思いがはせる。知らずして深い眠りにはいった。どのくらいの時が過ぎたか、何か聞こえてくる。

「二丁あがり」

といった。その声に気がついた。眼を開くと二人の衛生兵がいる。「大丈夫か」と自分に向かっていった。近くに寝ていた友はいない。死んだのだと気づく。一緒に枕を並べていた二人の友も故郷に帰った。私は昨夜故郷に帰りふたたびもどったのだ。

いらい、日一日と気力もどってきた。そんななかで終戦の報を知った。米軍機が到来し悠々として飛び、なにか大量にばらまいて行く。一片の紙片、

「日本軍の皆さん戦争は終わりました。故国の家族と会える日が参ります。長い間ご苦労様でした。お体を大切にしてください」

と昨日までのにくしみも、読んだ瞬間旧友の言葉のように嬉しく涙が止まらなかった。

戦いの惨めさ、悲哀は多く、筆舌に盡くせない。

南海に戦う

福島県 長峯 利夫

昭和十八年五月一日、三重県鈴鹿において我々は一個中隊の編成を完了した。部隊は五月下旬宇品港を出港、一路ニューブリテン島のラバウル港にむかい、平安な航海のち六月八日ラバウル港に入港した。六月三十日に前着の一個中隊をあわせて部隊の編成をおえ第四航空軍の第六飛行師団の指揮下にはいった。

ときに米軍は反攻の勢いをぞうちょうし、レンドバナッソウに上陸をした日であった。飛行師団も四月よりその主力はニューギニアに転進しつつあったので、我が中隊も各飛行場の整備の進展にともない、ニューギニアのウエワク、ハンサ、アレキシス、レンゴ（後にハイン）に展開することになった。

八月下旬ラバウル港出港、ウエワクに転進、任務につ